マーシャル方面遺族会
（旧クェゼリン方面戦歿者遺族会）
〒103　東京都中央区
日本橋人形町1－8－2
電話 03－661－8760
振替口座東京0-93487番
編集兼発行人　佐藤宗丕

平成二年度 慰霊祭総会

昼間楽平

平成二年二月十一日、小雨降るなか第二十七回慰霊祭及び総会が挙行されました。

今年は建国記念の日と重なり、他に六団体の慰霊祭もあって参集所を使用することが出来ず急遽靖国会館をお借りした為、会員に多少のとまどいがあったが、有志会員の御協力もあって九時には受付けを始めることができた。

出席者カードの記入に始まり、入口に張り出された昨年始めて墓参を許されたルオット島の写真を見、希望者は島の石を手に会場へ。

今年の会場は場所が違った上椅子席なので、なんとなく落着かぬご様子の会員の方々も一年振りの再会に笑顔も晴れやか、そして在りし日の父親の姿を、まのあたりにするかのように、成長した現代の担い手である長男、次男、三男、と打揃っての出席。会員中数少なくなられた母、そして子、孫、三代揃ってのご参集もちらほらと見られます。受付けのすんだ者から順に、お隣りの遊就館の本会関係の特別展示を拝観させて頂く。

十時四十分定期総会開催。

昼間常任幹事の司会に依り秋本常任幹事が議長となり議事に入りました。

佐藤会長から、昨年中の主要活動（概ね環礁に発表ずみ）を報告し、浮田名誉会長が一月十四日に逝去されたこと、及び、クェゼリンのホール・アキさんの便りの中に「ルオットの墓苑の整備にお骨折りいただいたF・セルフィーニー退役陸軍大佐が去年なくなられた由、とのお知らせがあったこと」が披露された。

ここで全員起立して浮田さんとセル

目次

慰霊祭　総会……昼間　楽平……1
会則改正……2
現地慰霊を希望する方々へ……2
慰霊祭直会旅行に参加して
……吉良　正義……3
ウォッゼ島戦没者慰霊祭
……土屋　太郎……4
マーシャル諸島情報……5
北満からマーシャルへ（1）
……秋元　輝夫……6
お便りの中から……7
アキ・ホール　ヒデコ・ラポイト　吉良　正良　井上　義夫
マジュロ小唄……蓮尾　諭吉……8
ブラウン環礁の玉砕（4）
……矢野　雄三……9
ブラウンへの想い
……寺西　ヒサ……13
靖国神社のみたままつり……13
弔　浮田名誉会長……14
村岡　達志　土屋　太郎
長谷川栄次　横溝幸四郎
石川　清　鈴木　忠正
徳原　勇　ナカタ　イサム
慰霊祭参列者芳名……17
名簿訂正……18
寄付者芳名……19
新刊〝歴史研究〟「靖国神社」
購読のおすすめ……20
靖国神社に二千万円奉納
英霊にこたえる会……20
本部だより……20

ルフィーニーさんの御霊に黙禱した。

又、クェゼリンのラポイント・ヒデコさんの手紙には「先に埼玉の峰岸さんを通じてさしあげた海中で拾った遺品は、クェゼリンの病院で勤務している方々がスキューバ・ダイビングで集めたもの。今後又協力したいとのこと」とあったことが紹介され、現地のお二人の手紙と遺品が展示されました。

次に黒川幹事から決算（別表）が報告され、高橋監事から監査結果の報告があり、会務、決算を一括審議してこれを可決しました。

新年度会務計画について、今年中に現地慰霊の希望者を尋ねたところ三十一名の挙手があり、その取扱いについては役員会で検討することとした。

次に会長から新刊書「靖国神社」が披露され、全文を「環礁」に転載したいが不可能なので、各人が購読されるよう要望し、本会を通じて購入される方には一冊一千円のうち五百円を本会から補助することを含む会務計画と、予算（別表）を原案通り可決しました。

次に会長から、会員の高齢化によって、毎年の慰霊祭を、厳寒の二月から陽春の候にしてほしいとの希望が多くなったことが発表され、協議の結果、別項のとおり会則が改正されました。

総会終了後直ちに遊就館前で松平宮司と大給湛子様を中央に会員全員にて記念撮影。霧雨の中も厭わず腕に覚えのあるキャメラマンがそれぞれシャッターを切る、そして参集所へ。

御手水（みたらし）にて心身を清め拝殿に歩を運ぶ。祖母の手を引くお孫さんの姿を英霊はなんとご覧になっておられるでしょうか。毎年目にする事ながら皆、心の中で御霊とお話し合っているかの様子が窺えます。

戦後四十五年の時の流れを彷彿させ今靖国の大前に額く総勢一八〇名は、今ここに在るわが身と、幽明界を異にした肉親の面影に諸々の思いに涙が溢れます。

献饌に続き祭主祝詞奉上、続いて玉串奉奠。佐藤会長、相談役大給湛子様、母親代表水野はな他四名。共に拝礼し、黙禱を捧げ静かに御本殿を退下いたしました。

会則改正

本年二月十一日の総会で、会則の一部が次のように改正されました。

一、第五条第一項中の「毎年二月第二日曜日」と、第六条第二項中の「毎年二月第二日曜日」をそれぞれ、「毎年三月又は四月」と改めます。

二、第十三条を次のように改めます。

「第十三条（会計年度）この会の会計年度は、毎年一月一日より十二月三十一日迄とします」

付則

この改正は平成二年二月十一日から施行します。

右の会則改正によって、来年からは定例の慰霊祭が、**「二月から、三月又は四月」**にかわります。

来年の慰霊祭は四月七日（日）です。

現地慰霊を希望する方々へ

一、二月十一日の総会で今年中に現地慰霊を希望する方が大勢ありましたが、二月二十五日の役員会で種々協議した結果、各島毎の希望者が少ないので旅費が割高になること、クェゼリン、ルオットの入域許可を頂いてから参加者を募るのでは日数に無理がある等の理由から、本会主催の現地慰霊は今年は行わないこととしました。

二、三月十六日、会長が厚生省援護局に次のことをお願いしました。

①平成三年度の厚生省主催現地慰霊に次の各島を指定頂きたい。

マーシャル諸島（クェゼリン、ルオット、マロエラップ、ウオッゼ、ブラウン）

ギルバート諸島（タラワ、マキン）

②実施時期は八月下旬が望ましい。

③戦没者一柱に複数の遺族の参加を認めて頂きたい。

（注）厚生省主催の現地慰霊には遺族に対し一定の条件のもとに旅費の約三分の一の国庫補助があります。行動等は前回の実績が参考になると思われますので、「環礁」51号4頁以降を御参照下さい。

正式の決定は平成三年四月になります。

三、本会の今後の運動の参考にしたいので、現地慰霊を希望する方は次のことを本部までお知らせして下さい。

①会員の方は、住所、氏名、年齢、性別、戦没者、戦没地、続柄。

②会友の方は、住所、氏名、年齢、勤務地、部隊名、巡拝希望地。

③今回始めてブラウン（エニウェトック）訪島をお願いしましたが、同島への希望者が、少いときは取下げることになりますので御了承下さい。

四、四月二十八日に財団法人日本遺族会から次の申入れをうけました。

①平成三年三月中に「マーシャル諸島及びギルバート諸島」への慰霊拝団を派遣する。

②成田発、グアム経由。全行程航空機使用、所要日数約八日間。費用約四十五万円～五十万円。

③マーシャル方面遺族会の会員、会友の参加を歓迎する。

（注）右日本遺族会主催の場合、旅費の補助はありませんが、参加者の資格、条件等に規制はなく、巡拝先も参加者の希望を優先するとのことです。

前回の日本遺族会主催の実績は、「環礁」4号5頁以降を御参照下さい。計画の詳細については本会又は左記にお問い合せ下さい。

〒102　東京都千代田区九段南一―六―五

（財）日本遺族会福祉事業部

電話　03―二六一―五五二一

慰霊祭直会旅行に参加して

吉良正義

平成二年二月十一日九段会館での朝を迎えました。私は今回初めて会友として慰霊祭に参加することができました。

暦の上では春ですが、あいにくの雨で冷え込みの厳しい日になりました。靖国会館で受付をして頂き、総会も予定通り終わり、愈々慰霊祭の時刻となりました。

御手洗（ミタラシ）で心身を清め先ず拝殿でお祓いを受け、御本殿へとすゝみましたが、渡り廊下を過ぎ御本殿に入ると、神々しさに身の引きしまる思いでした。

神前で瞑目し祝詞を拝聴すれば、戦友の顔が瞼に浮かび、四十数年前のことが、まざまざと思い出されました。当時私は十七歳、戦友達も二十歳前後の若者でした。私のクェゼリン在島中はまだ実戦はなく、椰子の木が茂り、その実を採ってサイダーに似た果汁を味わったり、非番の時には外海に出て紺碧の海に釣糸を垂れ乍ら故郷の山河をなつかしみ、また時には、水平線から上る月を眺めて肉親を偲んだり、そんな平穏な日々でした。

私の帰国後戦況はきびしくなり、遂に次々と玉砕の悲報に接することになったのです。

山もない平坦な珊瑚礁の小さな島で、

第26期決算報告書（自昭和64年1月1日　至平成元年11月30日）

マーシャル方面遺族会

1　一般会計収支計算書

＜収入の部＞

科目	金額
前期より繰越	3,755,195
会費	684,000
寄付金	1,326,300
受取利息	333,204
雑収入	106,970
（小計）	（2,450,474）
合計	6,205,669

＜支出の部＞

科目	金額
慰霊費	791,905
運営費	330,884
刊行費	440,860
印刷費	22,673
通信費	148,933
事務用品費	2,544
会議費	172,153
振替払込料	16,094
公租公課	66,502
雑費	3,412
（小計）	（1,995,960）
次期へ繰越	4,209,709
合計	6,205,669

2　一般会計財産目録（平成元年11月30日現在）

資産の部		負債の部	
科目	金額	科目	金額
現金	32,145		
普通預金	37,729		
郵便振替	74,520		
金銭信託	789,308		
中期国債	276,007		
国債	1,500,000		
有価証券	1,500,000		
		次期へ繰越	4,209,709
合計	4,209,709	合計	4,209,709

3　特別会計　（現地慰霊碑維持基金勘定）

収入の部		支出の部	
前期より繰越	7,500,000		
		次期へ繰越	7,500,000
合計	7,500,000	合計	7,500,000

（注）定額貯金及び貸付信託として保管

平成2年2月11日

監査の結果上記の報告は適正且つ正確であることを認めます。

監事　高橋鎮夫㊞
〃　柴崎晃㊞

マーシャル方面遺族会
会長　佐藤宗丕㊞

第27期一般会計予算

（自 平成1年12月1日
至 平成2年12月31日）

＜収入の部＞

科目	金額
前期より繰越	4,209,709
会費	1,200,000
寄付金等	1,100,000
受取利息	300,000
雑収入	50,000
（小計）	（2,650,000）
合計	6,859,709

＜支出の部＞

科目	金額
慰霊費	500,000
運営費	500,000
広報費	1,000,000
印刷費	30,000
通信費	200,000
消耗品費	30,000
会議費	200,000
送金諸費	50,000
公租公課	100,000
雑費	20,000
予備費	200,000
（小計）	（2,830,000）
次期へ繰越	4,029,709
合計	6,859,709

地下一米堀れば海水が出て来る、壕を堀ることもできない。防備や弾薬等も充分にはない、あの島で強烈な艦砲射撃や爆撃を受けた戦友達がどんなに無念だったろう。残酷としか言いようがありません。

二度とあの様な戦争があってはならない。国の礎となった方々の御霊を衷心よりお慰めすると共に、今日の平和と繁栄をいつまでも護り続けるよう次の世代へ申し継いで行かなければならない。そう心に誓い乍ら祈りました。

厳粛のうちに慰霊祭は終わり、私の長い心の重荷も少し軽くなった思いでした。

慰霊祭、総会も終り直会旅行に出発となりました。参加者六十二名は日通添乗員の案内によってバスに乗込み、車内で昼食をとり、東名高速を一路修善寺へと向いましたが、折からの雨で窓外は何も見えず残念でした。

途中、会長より新規入会者の自己紹介を求められ、私は昭和十八年二月より第六十一警備隊付としてクェゼリンで勤務し生還した者で、今回会友に加えて頂いた事を話しました。

バス内ではなごやかな雰囲気でしたが、連休のため車の渋滞がひどく、宿泊地の水月ホテルに着いたのは三時間遅れの午後六時半頃でした。入浴の後宴会になり、皆さん自慢の喉を御被露され、楽しいひとときを過ごしました。

翌十二日は晴天に恵まれ、爽快な気分で修善寺に詣で、歴史の数々を訪ねたり、また豪華客船ステラポラリス号内にあるスカンジナビアホテルと言う食堂で昼食、そこでは富士山を望む壮観に目を奪われ、昼食の料理に舌鼓を打ち、ほんとうに幸わせな一日でした。帰路は車の渋滞もなく順調に東京駅に着き、そこで殆どの方とお別れし、九段会館まで送って頂きました。

今後もできる限り参加させて頂きたいと思います。

ウォッゼ島戦没者慰霊祭

篤志会員　土屋太郎

ウォッゼ島戦没者慰霊祭は昭和32年以来数年おきに実施されてきましたが、55年を最後とし長らく行われていませんでした。

昨年マーシャル方面遺族会による慰霊祭が行われたとき、北海道から参集された稲毛三郎氏（会友）からウォッゼ島慰霊祭の実施について提案があり、篠崎英夫氏（会友）も、時代が平成に変わったし、靖国神社の大修築工事も竣工したので、ぜひこれを機に実施したい、でも今年は無理だ、来年やろうと即座に決心され、早速準備に着手されました。

ウォッゼ島は海軍の64警備隊が中心だったので、やはり同隊の者を中心にし、陸海軍の他の部隊の者に協力を頼むということで進められましたが、実際は準備、実施、後仕末ともすべて篠崎氏が独力でやられたといっても過言ではありませんでした。

何分にも、前回の慰霊祭以後長い歳月を経ていますので、各隊の代表者の方たちも、遺族の方はもちろん生存者の消息もなかなかつかめませんでしたが、遺族関係はマーシャル方面遺族会の会員名簿を利用させていただき大変助かりました。

案内状は結局、約四四〇通発送されましたが、宛先人不明で返送されたものが三〇通もありました。それでも予期以上の百余名が出席されることが分かり、篠崎氏も苦労のかいがあると安心されたものです。

平成二年四月二十八日の当日は天候に恵まれ、随分早くから参着される方もあり、午前八時、朝御饌（アサミケ）祭を告げる大太鼓が鳴り響くときには、すでに十数名の方がお集まりでした。北は北海道、南は九州と、全国各地から御遺族や戦友の皆様が参集されました。

午前十時昇殿参拝、祝詞奏上のあと各自瞑目して英霊や戦地のことを偲んだ後、靖国会館へ移動して記念撮影、続いて懇親会に移りました。

懇親会は奥信一氏のあいさつで始まりました。同氏は元64警備隊の軍医長だった方で、昨年一月ライオンズ・クラブから多数の自転車が南太平洋の島々に寄贈されたとき、贈呈式参加のためメジュロにもお出でになりました（厚

生省主催の慰霊団がメジュロを出発した翌日の一月三十日）。そのときウォッゼ島にも立寄られたので、その時の状況をお聞きすることができました。

終戦のとき、ヤシの木一本残さず爆風に吹きとばされていたウォッゼ島も、戦後、住民の方が植えられた木が青々と成育し、米軍来襲前に「ウォッゼ平和郷」と称していた昔の面影を取戻していたし、それにも増して嬉しかったのは、現地の方々が島を荒廃させた旧軍人に対し、何ら恨みを抱かれることなく、「戦争はだれの罪でもない。ただ何となく現われ、そして間もなく去っていったのだ」として、現地で戦った者にむしろ親しみを感じていたとのことを伺い、参集者もみな安堵しました。これに関連し、私は次のことを思い出しました。

現地住民は戦時中、飛行場のあった本島から北西にあたるオリメージ島に移住させられていました。同島も爆撃されるようになると、さらにその西方にあるカイゼン島に移住しました。ところが、ケゼリンに米軍が来た後いつの間にか、米軍占領の他の島に連れ去られていました（S19・8・26篠崎氏を長とする調査隊が確認）。その人たちは終戦後間もなくオリメージ島に帰還、そのとき「オリメージ島に宝石類――といっても珍しい貝類ではなかったかと思います――を埋めて置いたが知らないか」と米軍を通じて申入れがありました。それまで噂にも聞いたことがなく全く初耳でしたのでその旨伝えたところ、爆撃で吹きとばされたのだろうということで特に問題にはなりませんでした。数日後、スコップを少し譲ってもらいたいとの話がありました。このときにはまだ復員船の到着予定も分からず、われわれの農作業続行の要否も不明でしたが、喜んで要望に応じました。

奥氏のあいさつが終わって懇談に移りましたが、参着時に配られた参集者名簿は部隊別に、しかも遺族と生存者に区分してあり、同時に渡された十センチぐらいの大きな名札にも同じような区分と氏名が書いてあったため、初対面の者には特に好都合でした。遺族会の秋本英郎氏から配布された四枚綴りの島の詳細図は、遺族の方にも生存者にも現地を彷彿たらしめるものがあり、いっそう懇談に実が入りました。

何よりもよかったのは、従来の慰霊祭には見られなかった40名という多数の遺族の方が参集されたことで、これは遺族会の協力があったからこそでした。佐藤会長からはそのほかにも色々な御助言を得ましたし、当日は、わざわざ御参列を頂きました。

またこれまではいつもお出でになっていた吉見64警備隊司令、佐々本531航空隊司令はともに故人となられ、時代の推移を感じさせられましたが、吉見司令の御長男、吉見太郎氏の御参列を得たことは、英霊にとっても参集者にとっても有難い幸せでした。

マーシャル諸島情報

マーシャル・アイランズ・ジャーナル紙より

◇3月23日号より

『マジュロ環礁内で飛行機発見』

マジュロ発・3月21日

マジュロ環礁内で第二次大戦中の飛行機が発見され、グラマンTBF―3雷撃機と鑑定された。

アレレ博物館によるとTBF―3は1944年に就役し総計4664機が生産された。

翼長は54フィート（約18メートル）、全高16フィート（約5.3メートル）で単発エンジン付きで最高速度は270マイル、（432km／h）であった。

（注）ベリンジャー雷撃機ではないかと思われます。

『釣り大会』

マジュロ発・3月20日

先週セントパトリック記念日のフィッシング大会が開催され、ビルフィッシュ（かじき）部門においては280ポンド（約130kg）のまかじきを釣りあげたヘンリー・カジョリングの上に勝利の女神が微笑んだ。そして彼は賞金一〇八〇ドルを手中にした。

別の部門では、ティモシー・アノックが28ポンドのバラクーダ（大かます）を釣りあげ賞金225ドルを得た。

（8頁へつづく）

北満からマーシャルへ（1）

＝ある陸軍部隊の苦闘＝

秋元輝夫

この記録は、昭和十三年一月臨時召集礼状を受け取り、故郷の父母の懐から巣立ち、茨城県水戸歩兵二連隊から、遠い北満「中国西北地区」の果てに在った関東軍第三部隊守備隊に移り、昭和二十年八月マーシャル群島で終戦を迎え内地病院に帰還するまで、私が歩いた七年余りの間経験した数々の事柄を、断片的に記したもので、そこで過ごした戦友諸兄の面影を思い起こし、当時お世話になった諸兄に深く感謝しながら綴ったものでございます。

昭和十八年

昭和十七年暮れガダルカナル島の撤収作戦以来米軍の反撃も日増しに強まり、昭和十八年九月頃ともなると米機動部隊の内南洋方面作戦が活発に展開されて来た。大本営においても此等方面の戦況検討が連日続き、遂に十月始め陸軍部隊の大量が中部太平洋方面の防備に転用派遣される事が決定される。

北満「中国西北部」の秋は短く、緑の山野も一朝にして紅葉の世界に変わり、十一月ともなれば吹く風も肌寒く、防寒被服に着替えた若い元気な現役兵の戦士達は、南方米軍の反撃状況を気にしながら猛訓練に、そして担当地域の警備に多忙な日々を送って居た。

関東軍第三独立守備隊

関東軍直轄独立守備隊の創設は古く明治四十三年三月に始まり、その後昭和八年十月関東軍の独立守備隊増強計画に基づき、第三独立守備隊が当時満洲西北部方面の鉄道警備並びに同地域の治安維持の為編成誕生した。その後部隊の編成改、守備地域の変更等を重ねながら、昭和十八年当時第三独立守備隊司令部（通称号満洲第201部隊）は独立守備三ケ大隊を基幹として、浜洲線「ハルピン―満洲里」平斉線「四平街―チチハル」白阿線「白城子―阿爾山」斉北線「チチハル―北安」その他支線沿線の重要駅舎、橋梁、隧道等の警備と同地域の防衛、治安維持を担当して居った。

海上機動第一旅団

昭和十八年十一月十六日関東軍第三独立守備隊司令部に海上機動第一旅団臨時編成「甲」が下令される。即ち隷下独立守備第十一大隊「昂昂溪」独立守備第十五大隊「札蘭屯」独立守備第十六大隊「白城子」駐屯の部隊にチチハル方面に展開中の第十四師団各聯隊「水戸第2聯隊、宇都宮第59聯隊、高崎第15聯隊」より要員が補充され、海上機動第一旅団と改編、昭和十八年十一月三十日動員編成を完結する。

海上機動第一旅団司令部　「駆三一三〇部隊」（三、九四二名）

旅団長　西田　祥実　陸軍少将

第一大隊　「元独立守備第十一大隊」「駆三一三一部隊」
　大隊長　橋田　正弘　陸軍中佐
第二大隊　「元独立守備第十五大隊」「駆三一三二部隊」
　大隊長　阿蘇太郎吉　陸軍大佐
第三大隊　「元独立守備第十六大隊」「駆三一三三部隊」
　大隊長　矢野　俊雄　陸軍大佐
機関砲隊　（八九式機関砲六）「駆三一三四部隊」
　砲隊長　松波　春香　陸軍中尉
戦車隊　（九五式軽戦車　十）「駆三一三五部隊」
　隊　長　市川　正国　陸軍中尉
工兵隊　「工兵三ケ小隊」　「駆三一三六部隊」
　隊　長　木村一千人　陸軍大尉
通信隊　「駆三一三七部隊」
　隊　長　木下　隆次　陸軍大尉
衛生隊　「駆三一三八部隊」
　隊　長　塚田　重一　軍医大尉
輸送隊　「駆三一三九部隊」
　隊　長　村田　光慶　陸軍中佐

機動第一大隊、第二大隊、第三大隊各々の編成は

◎歩兵三ケ中隊「一ケ中隊は歩兵三ケ小隊　機関銃小隊　曲射砲小隊で編成」
◎迫撃中隊　「軽迫撃砲　十二門」
◎山砲中隊　「山砲四門　又は山砲二、速射砲二門」
◎作業小隊

昭和十八年十二月七日、旅団各部隊は青森、山形、岩手県各地区等より召集された予後備兵編成の部隊に守備地域の引き継ぎを終わり、それぞれ駐屯地「旧満洲」を出発する。

十二月九日「木」旧鮮満国境、安東通過

十二月十一日「土」旧朝鮮釜山到着、集結を終る。

同釜山にて兵器「九九式小銃、軽機関銃等」弾薬、被服、糧秣等を受領する。

十二月十三日「月」マーシャル群島到着時の配備計画に基づき、輸送船　但馬丸、日美丸「第一分団」別編成の南洋第二支隊「関東軍第四独立守備隊改編部隊」の日蘭丸、良洋丸「第二分団」と共に船団を組み同日午後乗船を完了する。

海上機動第一旅団輸送指揮官は機動第三大隊長　矢野俊雄大佐であった。

昭和十八年十二月十四日「火」夕闇迫る午後四時護衛艦三隻に護衛され釜山港を出港す。船団は途中下関より瀬戸内海に入り宮崎港に仮泊、十二月十六日「木」払暁「午前五時頃と記憶する」豊後水道を通過し、途中敵潜水艦の攻撃を避けながら一路南洋諸島に向かう。

十二月二十六日「日」夕刻南洋群島トラック島に到着、同地に於て第四艦隊の指揮下に入りマーシャル方面の防衛に関する命令を受領、これに基づく旅団の防衛計画細部の命令を下達さる。部隊全員に対して、故郷の父母兄弟に

（以下17頁へ）

お便りの中から

発クェゼリン（一九〇〇・一、一六）
アキ・ホール

御家族の皆様、遺族会会員の皆様にはお健やかに新しい年をお迎へのことお慶び申しあげます。

御丁寧なお手紙や、クリスマスカードその他いろいろ頂きながら御返事もできなくて申訳ありません。実は、息子家族や妹がハワイに住んでいるので、クリスマスとお正月をあちらですごしていたのです。早速御質問にお答へいたします。

①退役陸軍大佐F・セルフィーニーさんは去年亡くなられたそうです。悲しいニュースです。

②ルオット墓苑の白い石は確かにあの島のものだそうです。

③クェゼリンやルオットの墓苑に咲いている花は日日草です。

④デブラ・フルトンさんは渉外担当官です。デブラさんのおめでたいニュースをつけ加へます。一月十三日は彼女の結婚式で私達夫婦も呼ばれました。午後七時に教会で式を挙げ、レセプションはV・F・Wで行はれました。

御主人は、ハーバートカンストラクションにお勤めのシビリアンで、お名前は、トーマス・ミラーさん。とてもハンサムな方です。

⑤52号の「環礁」の皆様の文章を読んで涙がとめどなく出ました。慰霊祭にお集りの皆様に宜しくお伝へ下さい。皆様とまたお逢いできることを楽しみにしています。

（お手紙の宛先は次の通りです）

Mrs. Aki Hall
P. O. Box 1083
APO San Francisco 96555
U. S. A.

発クェゼリン＝一九〇〇年一月一四日
ヒデコ・ラポイント

クワジェレンは雨期でもないのに毎日雨が降り続いています。でもアメリカ本土の東部を襲っている寒波に比べれば温暖さに感謝しています。

先日クリスマスカードや「環礁」、「25年のあゆみ」など沢山いただきましてありがとうございました。

お手紙によりますと、埼玉の峰岸さんから遺品数点が届けられたそうですが、あれは私の勤めているクワジェレン・ホスピタルの職員達からの贈り物です。「生田丸」と書かれた木札は、手術室のレイモンド・ウォルフさん。探信儀プレートは、病院の事務長レイモンド・ウェストさんからです。

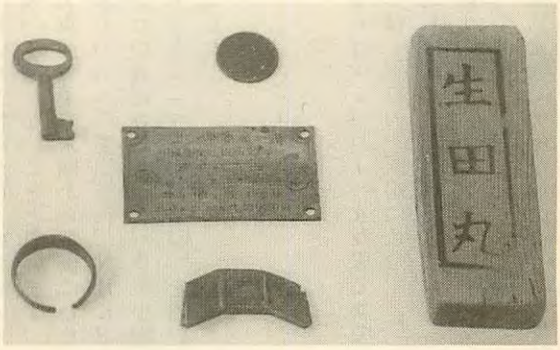
二人共よくスキューバ・ダイビングに行って珍らしい物を見つけてきます。そして宝物にしていたのを寄付して下さったのです。

クワジェレンの海底に沈んでいた品々は、御遺族にとって貴重なものと思われますので、今後ダイバー達にお話して協力をお願いするつもりです。

二月十一日の慰霊祭までに、この手紙の着いてくれるのを祈っております。昨年クワジェレンとルオットにいらした会員の皆様に宜しくお伝へ下さい。

（お手紙の宛先は次の通りです）

Mrs. Hideko Lapoint
P. O. Box 914
APO San Francisco, Ca 96555
U. S. A.



※　写真の木札「生田丸」は特設砲艦（二九六八トン）で十七年九月に横鎮六特をイメエジからタラワに輸送しています。十九年一月十二日クェゼリン環礁で空爆により沈没しました。

真鍮のプレートには「九三式探信儀一型　距離指示装置〇一　製造番号83　昭和？年7月製作　株式会社東京計器製作所」と彫られています。

会友吉　良　正　義

拝啓　突然お手紙を差し上げる御無礼をお許し下さい。

実は私事、四十六年前（昭和十八年二月から昭和十八年九月迄）マーシャル群島のクェゼリン島に於て第六十一警備隊付として任務についていた者でございます。

同年九月十一日、第七期普通科内火術練習生として横須賀海軍工機学校に入校の命を受け即日、千早丸便乗、十月四日、徳山帰着、この事によってクェゼリン島より生還したのでございます。

十九年一月十八日、工機学校卒業後国分海軍航空隊付を経て十九年十一月七日、川棚警備隊付（魚雷艇講習員）として教育を受け二十年七月十三日、第三十五突撃隊（魚雷艇乗員）を命ぜられ、出撃を目前にして終戦を迎え戦後、色々な事がありましたが何とか六十三歳のこん日まで生きて来ました。

クェゼリン島勤務当時、私は十七歳でございました。一緒に行った同年兵が二名戦死しております。今でも目を閉じると、紺碧の海、椰子の木の点在する珊瑚礁の島や戦友の顔が浮かんで来ます。

毎年二月六日と、八月十五日を迎えるたびにクェゼリン島で散った戦友の

事が思い出され、歳をとるにつれ出来ることならクェゼリン島を訪ねて戦友の御霊をお慰めしたい、それが奇しくも生きて帰った私の努めの様な気になり、今年八月、旅行社に問い合わせましたが、クェゼリンは米軍の許可がなければ行けない事が分かり断念しました。

その後、大分県庁の老人福祉課でクェゼリン島戦没者名を調べて頂いたりしているうち、県の方のお計らいでマーシャル方面遺族会の事を教えて頂き又、環礁第五十二号の写しも送って頂きました。

読んで行くうちに、平成元年の一月及び八月にクェゼリン方面の慰霊巡拝の行なわれた事を知り、もう少し早く知っていたら私も加えて頂けたのではないか、と残念でたまりません。

出来る事なら会友に加えて頂いて今後、このような御計画があります時は是非共、参加させて頂きたい、と存じまして、無躾とは思いましたが、お手紙差し上げた次第でございます。

何卒、会友にお加え頂くこと宜しくお願い申し上げます。

平成元年十二月二十日

（大分市光吉台一―三―三九）

（注、吉良様には早速会友として御入会頂き、二月十一日の慰霊祭と直会に御参加頂きました）

会友　井上義夫

兵の墓みな二十代花吹雪

私が住む長崎県佐世保市の旧海軍墓地の桜もそろそろ散りはじめました。ここの広い構内には旧海軍の佐世保鎮守府管内十七万余柱の英霊が祀られておりますが、サクラの名所でこの時期は街の人々に一般開放、善男善女お詣りかたがた花見客で賑わっております。

会長様はじめ遺族会役員の皆様、ご遺族の皆様その後もお変りございませんか。二月の慰霊祭と総会、そして直会に今年も参加させてもらいましていろいろお世話いただき誠にありがとうございました。

クェゼリン島玉砕のあの日から早や四十六年、夢のように経過しましたが同島に勤務した私にはまだ昨日のように思い出されます。慰霊祭に全国からお出での遺族の方々逐年お齢を重ねられますが、当日お顔を拝見しお話しをしていてまた直会で一緒に行動していてその明るい表情、生々としていられるさまに接して救われる思いがいたし本当にホッといたします。

どうかこれからもお体をいとわれて亡きご主人さま亡ききょうだいさまの分まで長生きなさって下さい。

今年の収穫はクェゼリン島から玉砕数カ月前に内地へ還られた大分県出身の吉良正義様が最近になってこの会を知られ会友に入られて初めて参加なさりこれから遺族の皆さんの力になれば……と申されたこと、本当に嬉しいニュースでした。よろしくお願い致します。

私は郷里の熊本県天草出身のクェゼリン島玉砕者が三十数名おられることを調査していましたが、昨年お盆の日に天草のお寺に多くの遺族のお集まりを得て霊砂を拝し懇談を交し供養をして頂きました。そして四名の方が遺族会に加入して下さいました。

遺族の皆様段々気候はよくなりますが、どうかご自愛下さい。

（佐世保市木風町六九六―一）

マジュロ小唄

蓮尾諭吉

青く澄みきった空、紺碧の海、真白な珊瑚礁の浜、椰子の林、人なつこい島の人々、一度でもマジュロを訪れたことのある人であれば、マジュロに対して抱いた愛惜の念は、いつまでも心に残って離れないことと思います。

大東亜戦争の末期から戦後にわたって多くの人々に愛唱され、NHKでもたびたび放送された「ラバウル小唄」にちなんで「マジュロ小唄」を書いてみました。

マジュロ小唄

さらばマジュロよ　また来るまでは
しばし別れの　涙がにじむ
恋し懐かし　あの島見れば
椰子の梢に　十字星

（注）元歌「ラバウル小唄」（一番から五番まである）は、若杉雄三郎ほかの作詞、島口駒夫作曲になるもので、南太平洋の基地ラバウルから第二十五航空戦隊が後方基地に引き揚げるときに歌われたということになっている。なお、ラバウルという部分をいろいろ地名を変えて歌われた。血なまぐさい戦闘のことがまったく歌われず、曲がまた闊達で快いのが喜ばれた。この「ラバウル小唄」には、さらに若杉雄三郎作詞の「南洋航路」という元歌があって、昭和十五年九月に新田八郎が吹き込み、ビクターレコードから出された。これに兵隊たちが新しく歌詞を補ったのが「ラバウル小唄」となったものである。なお、この注記は講談社文庫の「日本の唱歌」（下）の二七九頁に基いた。

（5頁よりつづく）

また彼は15ポンドのマヒマヒを釣りあげ250ドルの賞金を手に入れた。カジマ・ミノルはまぐろ部門で102ポンドのきはだまぐろを釣り、270ドルの賞金を得た。

その他きはだまぐろをはじめ100ポンド以上のまかじきが数本上がった。

（注）マジュロはやはりまぐろの良い漁場のようです。

（山口良二　訳）

ブラウン環礁の玉砕（4）

矢野雄三

聯合艦隊の〝大誤算〟

そもそも日本海軍が、トラック要塞の安泰をはかるため開戦直後に進出したラバウルは、いまや南東戦線の要の位置にある。

そのラバウルが、山本前長官の「い号」作戦以来内地で苦心して再建され九月中旬トラックに進出、待機中だった「第一航空戦隊」（一航戦）の南東派遣を執拗に求めてきたのである。大本営も、南東派遣には積極的だった。

古賀長官は、自らの主張する〝日米艦隊決戦〟と、母艦航空隊の〝南東投入〟との板挟みになった。

前にも引用した『四人の聯合艦隊司令長官』の著者吉田俊雄氏（元海軍中佐）は、この時期の聯合艦隊の対応をこう分析する。

しかし、古賀は、Z作戦を第一に考えていた。いま一航戦を南東に出して大損害を出し、またぞろ再建しなければならなくなると、Z作戦ができなくなる。だから、神経質すぎるくらいに、空母機の南東投入を拒否しつづけてきた。ところが、ここで福留参謀長が、豹変した。一番驚いたのは、三艦隊だ。（中略）

「多少の損害は受けるかも知れないが、再建は、内地でなくトラックでさせる。再建しながらZ作戦に備えればよい」

よくこれまで楽観的でいられるもの、と驚くほど福留は楽観的だった。命令にも「過度の消耗はしないように」と要望をつけた。しかし、彼らは「い」号作戦のとき山本長官が自分でラバウルに進出し指揮をとったようにはしなかった。油がなくて動けないトラックの「武蔵」から動かなかった。

古賀長官は、十月二十八日、「い」号作戦（同年四月発動）の故知にならい、戦勢挽回を期した大規模な航空撃滅戦の実施をついに決断する。

後々まで、戦史研究家の間で問題とされる「ろ」号作戦の発動である。

小澤長官直率の「二航戦」（空母翔鶴、瑞鶴、瑞鳳）一七三機は、十一月一日午後ラバウルに進出、現地の所在兵力（実働約三七〇機）と合流、南東方面の熾烈な航空戦に立ち向かうことになった。

だが、この一航戦のラバウル進出と軌を一にするかのように、ブーゲンビル島北端のブガが砲撃と艦載機の攻撃を受け、一日未明にはハルゼー軍主力の米第三海兵師団が、同島中西部のタロキナ岬に大挙上陸との無電が入る。

ラバウル要塞の外郭であるブーゲンビル島には約四万の守備隊がいたが、大部分は南端のブイン方面に集中し、タロキナ地区の守備は手薄だった。タロキナからラバウルまではわずかに二〇〇浬（三七〇粁）だし、小型機で一時間の近距離にある。

この戦局の急変に押されて聯合艦隊司令部は、さらに〝虎の子〟の決戦部隊である「第二艦隊」（栗田健男中将指揮）の全力を、ラバウルに投入することになる。

さすがに、草鹿南東方面艦隊長官が心配し、「もう少し作戦のなりゆきを見定めた上、もう少しあとで、もっと小さな兵力を回してほしい」と古賀に意見具申したが、福留は反ばくした。

「敵艦隊を撃滅するためには、バラバラに当たっていてはいけない。決戦の機会を得たら、全力をあげて戦いを挑まなければならない」（同前引用）

――だが不幸にも、この二つの決断（一航戦と栗田艦隊の南東投入）は、聯合艦隊を悲劇的な〝自縄自縛〟に追い込む結果となる。

それが、「Z作戦」を第一義に考えていた古賀長官自身の意思によるものか、「福留参謀長の豹変、長官の名で行なった福留作戦」（吉田俊雄氏）であったのかは、議論の分かれるところであろう。福留繁中将の戦後の証言記録（米戦略爆撃調査団報告）は、吉田氏の指摘とは真っ向から対立する。

「ラバウル派遣は、大本営から何の圧迫も受けずに、ただ古賀大将の決心によって行なわれました。古賀大将は、最後の決戦のために全兵力を控置したいと考えていました。それが、ラバウルから航空兵力の援助を絶えず要求されても、なかなかこれに応じなかった理由です。なぜなら、割いてやれる航空部隊といっては艦隊決戦にはなくてはならない母艦機しか残されていなかったからです。しかし十一月になって、ブーゲンビル島上陸作戦が始まると、彼は、これら母艦部隊をラバウルに送らざるを得ませんでした」

その黒白はともかく、絶対防衛線をマリアナまで大きく後退させるという中央の決定にもかかわらず、聯合艦隊はなお南東方面に固執して、とっておきの〝決戦兵力〟を次々と注ぎ込んでいった事実に変わりはない。

――かくして、ラバウル基地の海軍航空部隊は、十一月一日第一次攻撃を開始、午後には到着したばかりの一航戦も加わって、ブーゲンビル島周辺海域に群がる敵艦船に対し、連続必死の攻撃を反復した。

この日のタロキナ沖敵船団への攻撃では、輸送船二、巡洋艦一を撃沈し、わが方の損害は零戦一七、艦爆五と報告されたが、日本軍の激しい攻撃を予想していた連合軍は、すでに整備を終わったムンダおよびヴェラ・ラヴェラ基地から発進した戦闘機の掩護の下で迅速な上陸作戦を整えていた。

わが必死の航空攻撃も、敵船団に多大な損害を与えることなく、その日が暮れようとする頃には、約一万四〇〇〇名の米「第三海兵師団」が揚陸を終わっていた。

翌二日には、西ニューギニアを基地とする戦爆連合約一五〇機がラバウル基地に攻撃をしかけ、わが方もまた敵船団を求めてラバウル基地を発進、駆逐艦一撃沈、巡洋艦一、輸送船二炎上、撃墜一二七機の戦果を報ずるなど、彼我入り乱れての熾烈な航空戦の幕が切って落とされた。

一方、栗田中将直率の「第二艦隊」は、十一月五日午前六時ラバウル湾を圧して入港、タロキナ逆上陸部隊支援

のため、午後二時出撃の予定で準備を進めていた。

しかし、その艦隊行動はすでにトラック出撃時から敵の察知するところとなり、午前九時、米空母二隻（サラトガ、プリンストン）から発進した空母機九七機の〝不意打ち〟を受けた。

零戦は直ちに抗戦し、湾内の艦船および陸上砲台も激しい対空砲火を浴びせたが、狭い湾内で行動の自由を奪われた艦隊の抵抗には、限度があった。

この戦闘で敵機四九を撃墜したが、「愛宕」以下重巡五隻が被弾、「高雄」は命中弾一一発を受け、右舷前部水線に大破孔を生じた。そのほか大小艦艇に被害があり、死傷者も三〇〇名に達するなど、第二艦隊はアッという間に戦闘能力を失なうことになる。

栗田艦隊は、応急修理を要すものおよび逆上陸作戦に参加する第二水雷戦隊「二水戦」（軽巡一、駆逐艦四）をラバウルに残し、八日空しくトラックに引き揚げるが、その二水戦も五日後（十一日）には空母五隻で来襲した敵機の攻撃にさらされ、駆逐艦一沈没、同一隻航行不能、軽巡一、駆逐艦二損傷という手痛い損害を受けた。

同日夕刻、わが方からも雷撃機一八機が敵空母を求めて出撃、大型空母一、巡洋艦二、巡洋艦または駆逐艦一撃沈、中型空母一炎上後沈没と報告、大本営はこれを『ブーゲンビル島沖航空戦』と呼称した。だが、事実は余りにも違っていた。彼らが攻撃したのは上陸用舟艇二隻と魚雷艇一隻のみであった。

また八日には、一航戦と基地航空部隊が艦爆二六、艦攻七一機をもってタロキナに隣接するムッビナ岬沖の敵輸送船団を攻撃、輸送船二、駆逐艦三を撃沈し、さらに同日、約三〇隻から成る他の輸送船団および護衛中の敵艦隊に対して零戦一三機の掩護下で艦攻一二、陸攻四機が雷撃を行ない、戦艦四、巡洋艦二、駆逐艦三、輸送船二以上を撃沈、未帰還機二七と報じられた。

いわゆる第二次ブーゲンビル島沖航空戦だが、「米国海軍作戦年誌」によれば、この航空戦での米側損害は軽巡一、上陸用舟艇一損傷とあるにすぎない。

タロキナの戦いが始まってからわずか一週間で、ラバウル航空隊はすでに八〇機を失っていた。一航戦も連日の戦闘で大きな損害を出し、十日までは三〇%を切っていた戦死者も、十一日の空母攻撃で一気に五〇%にハネ上がった。（第三次ブーゲンビル沖航空戦）

――この日、来襲する敵機動部隊を発見したラバウル基地からは、一航戦の空母機六七機（艦爆二〇、艦攻一四、零戦三三）と、基地航空隊の新鋭「彗星」四機が勇躍出撃していった。だが、わが方の接近を三〇分以上も前からレーダーで知った米機動部隊は、戦闘機三六機を約七〇キロ前方に待機させたうえ、水上艦艇には弾頭に小型レーダーを装着した近接信管（VT信管）がゆきわたっていた。飛行機を直撃しなくても、近くまで来れば炸烈して機体を破壊ないし炎上させるという〝新兵器〟の登場である。

その日、はからずも攻撃部隊は、やがて日米最後の決戦場となる『マリアナ沖海戦』（翌十九年六月十九日早朝攻撃開始）で、あの決定的な威力をみせつけられる〝鴨撃ち〟戦法の洗礼を受けることになった。

攻撃部隊はついに敵に一発の命中弾も与え得ず、艦攻は全滅、艦爆一七、彗星二、零戦二機がそれぞれ未帰還となった。

ラバウルに進出からまだ半月もたたぬうちに一航戦は一二一機を失ない、残るは艦爆七、艦攻六、零戦三九の計五二機だけとなった。進出時の実に七〇%の消耗である。これに基地航空部隊を加えると、損害はすでに三〇〇機以上にのぼっていた。（大本営発表はわずかに七二機）これ以上戦闘を継続すれば、一航戦〝再建〟の基盤まで危うくする虞れがあった。

――ここに至って古賀長官は、十二日午後、第三次ブーゲンビル島沖航空戦を最後に「ろ」号作戦の終結、一航戦のトラック帰還を命じざるを得なくなった。

聯合艦隊としては、「十月下旬ノ情勢ニ於テ、モシ南東方面ヲコノママ放置スレバ明年中期マデノ持久ハモトヨリ、悪クスレバ本年一杯モ危ナク、戦線総崩レノ虞レ大ナリ」と称し、いまこそ南東方面における戦略態勢挽回の最後のチャンスと判断して「ろ」号作戦を発動し、一航戦のみならず、あえて第二艦隊の急遽派遣にまで踏みきったのであろう。

――だが、結局は、戦勢を覆えすに至らなかったばかりか、逆に一航戦の三分の二を失い、第二艦隊の主力をも損傷するという悲惨な結末に終ったのである。

一航戦は即刻内地へ帰して再建を急がねばならず、また十四日には古賀長官が、シンガポールで再建→訓練中の「第二航空戦隊」（二航戦）に対し十二月上旬までにトラックに進出するよう発令したものの、その「二航戦」が再びトラックに到着するまでは、聯合艦隊の総力を結集する「Z作戦」は、もはや、やりたくてもやれない苦境に陥っていた。

この時期、トラックにいた無疵の艦艇は超弩級戦艦大和・武蔵、戦艦長門・扶桑・金剛・榛名、重巡熊野・鳥海・鈴谷・筑摩のほか軽巡五隻、水雷戦隊三隊、潜水艦一八隻にすぎなかった。

中部太平洋へ「二路並進」

しかも、この聯合艦隊の〝大誤算〟をまるで嘲笑うかのように、中部太平洋における米軍総反撃の幕が切って落とされる――。

三〇%に激減した「一航戦」がトラックに帰還したまさにその翌日から、ギルバート諸島方面の緊張がにわかに高まり、十一月十九日早朝にはギルバート諸島の要衝「マキン・タラワ」環礁が、大規模な敵機動部隊の空襲にさらされたのである。

それは、太平洋方面における連合軍総反撃の〝序幕〟ともいうべき第一撃であったが、遺憾ながら、わが方にはまだ確たる認識はなかった。

ニューギニア→フィリピン→台湾→沖縄→日本本土進攻を主張したマッカーサー案に対し、これに中部太平洋進攻路を加えた「二路並進」案を採用し、前者のみの場合の日本軍による側面的脅威と、その兵力集結のチャンスを一掃し、かつ米軍の最終進撃路についての判断を迷わすことが最上策とした米統合参謀本部は、南方ビスマーク群島の攻略と並行して、すでにギルバート→マーシャル→カロリン進行路線を決定していた。（モリソン大佐著『米国海軍戦史』より要約）

事実、わが大本営で後方要線におけ

る新作戦構想が具体化しつつある頃、中部太平洋の先端基地であるギルバート諸島をはじめ、マーシャル群島、カロリン諸島に対する米軍の反攻準備は着々と進められていた。

そして大本営が、『絶対国防圏』の設定を御前会議の席上で決定したのと同じ九月三十日、連合軍側では、ニミッツ太平洋方面総司令官から統合参謀本部の作戦部長キング元帥宛に、当面の対日進攻計画を策定した『中部太平洋作戦日程表』が提出されていた。

日程表には、ギルバート→マーシャル→カロリン諸島へと進む進攻路、五つの攻略目標とそのDデーが明示されている。

★ギルバート諸島マキン、タラワ（一九四三年一一月一五日）（傍線筆者）

★マーシャル諸島クェゼリン、ウオッゼ、マロエラップ（翌四四年一月一日）

★マーシャル諸島エニウェトク、カロリン群島クサイエ（二月一五日）

★カロリン諸島ポナペ（六月一日）カロリン諸島トラック（九月一日）

Dデーから四日の遅れはあったものの、敵総反撃の触手は、早くもギルバート諸島に伸びてきた。

しかも、当時のわが索敵能力ではその全容を捉えることは困難だったとはいえ、この時期、ギルバート沖に姿を現わした米機動部隊こそは、中部太平洋突破を主任務としてその年の春以来着々整備されてきた米海軍の〝主力〟であった。

中部太平洋部隊の主戦力として新たに登場したこの「第五艦隊」は、艦艇および航空機、上陸部隊の合成兵力によって編成され、正規空母六、軽空母五、護衛空母八、新式戦艦五、旧式戦艦七、重巡九、軽巡五、駆逐艦五六のほか、二九隻の輸送船と貨物船、多数の上陸用各種舟艇など総勢約一八〇隻から成る一大兵力であった。その規模は、開戦当時のわが聯合艦隊の全兵力にも匹敵する。

旗艦「インディアナポリス」に座乗し、この新鋭かつ巨大な攻略船団の総指揮に当たったのは、ミッドウエー海戦でわが聯合艦隊を撃破したレイモンド・A・スプルーアンス中将（中部太平洋艦隊司令長官）であった。

総司令官ニミッツは、この離島攻略戦を「ガルバニック作戦」（流電作戦）と命名、主攻略目標はわが大型航空基地のあるタラワ環礁「ペティオ島」とし、二次目標を水上機基地のあるマキン環礁「ブタリタリ島」に置いた。

しかもスプルーアンスは、彼の『将官に対する一般的指示』の中で、「日本艦隊がガルバニック作戦に妨害を加えようとした場合、敵艦隊の撃滅が最優先する。日本海軍を叩き、その大部分を奪うことが究極的な勝利につながる道となる。ガルバニック作戦の全期間を通じ、艦隊決戦にそなえていなければいけない」と強調し、わが聯合艦隊の出現と〝日米艦隊決戦〟の実現を強く望んでいた。

一方、迎え撃つわが聯合艦隊司令部にしてみれば、タロキナ沖航空戦以来の〝幻の大戦果〟をある程度鵜呑みにしていたため――実際は皆無に近かったのだが――、中部太平洋方面における新たな敵の攻勢は相当遅れるだろうとの楽観的な見方に立っていた矢先のことである。

しかも、艦隊決戦用に温存した〝虎の子〟兵力は、すでに南東方面への投入で一気に激減し、とりわけ母艦機の壊滅に近い損耗は致命的だった。ギルバートに対する航空支援も、水上部隊をもってする反撃も、もはや不可能な状態にあったといっていい。

第四艦隊司令長官（小林仁中将）は、直ちにマーシャルに展開中の「第二十二航空戦隊」に反撃を命じ、聯合艦隊司令部も、とりあえず北東方面艦隊所属の「第二十四航空戦隊」の転進可能なものと、南西方面艦隊所属の陸攻隊を急遽トラック方面に転進させ、同日夜「丙作戦第三法用意」（ギルバート、ナウル、オーシャン方面に来攻時のZ作戦）を発令、潜水艦部隊も、所定の邀撃配備についた。翌二十日も、敵空母機はタラワ、マキン、アパママを反復爆撃するとともに、マーシャル諸島のミレ、ヤルートに対しても空襲を加えてきた。

ギルバート諸島の失陥

二十一日未明、タラワ付近海面に集結した米攻略部隊は、熾烈な艦砲射撃に続いて午前三時頃、優勢な「第二海兵師団」をペティオ島に上陸させ、マキン環礁のブタリタリ島に対しても、「歩兵第二十七師団」がほぼ同時に上陸を開始してきた。

――古賀長官は同日早朝、『丙作戦第三法発令』を下令した。

Ⅰ、主隊及ビ遊撃部隊ハ二十三日トラック発、好機ヲ捉エ敵艦隊ト決戦ヲ行ナウ

Ⅱ、一部兵力ヲ以テ在ポナペ「陸軍甲支隊」ヲマーシャル群島方面ニ輸送シ、好機ギルバート諸島方面敵上陸地点ニ逆上陸ヲ決行、敵上陸部隊ヲ撃滅スル

この時、タラワの守備に当たっていたわが海軍部隊は、第四艦隊麾下の「第三特別根拠地隊」（指揮官・柴崎恵次少将）を主力に、「佐世保第七特別陸戦隊」「第百十一設営隊」「第四施設部派遣隊」を合わせた計四、八三六名。マキン守備隊は、第三特別根拠地隊派遣の一部二八四名であった。

中でも、タラワの防備は入念をきわめていた。同島西部の南北海岸には、ヤシ丸太の防壁が連ねられ、海中には丸太の防塞、コンクリート柱に角材を植え込んだ障害物、丸太にワイヤーで連結した機雷が設営された。陸上には、堅固なコンクリートの司令部をはじめ、造りのコンクリート、鉄板、ヤシ丸太、サンゴ礁岩砂を利用した一人ないし三〇人用の半地下式トーチカ陣地が多数構築され、その多くは地下壕で互いに連絡、直撃弾以外では破壊されない堅牢さを誇っていた。

守備隊は連日、払暁・日中・夜間訓練を反復、守備隊の練度と士気はきわめて高かった。

しかし、これに襲いかかった敵上陸部隊は、タラワ攻略任務の海兵師団一万八五〇〇名（わが守備隊の四倍弱）、マキン攻略の歩兵師団約六、五〇〇名（同約二三倍）であり、兵力比においても大きくわが方を圧していた。

早くも二十一日午前四時半にはマキンとの通信連絡が途絶え、タラワも翌二十二日午後一時半頃連絡を絶った。

この間、マーシャル群島に展開していた「第二十二航空戦隊」（約一〇〇機）は、二十日陸攻一九機を出動させたが、途中で米艦載機の邀撃によって大半を失い、二十一日の敵上陸直後に出撃した陸攻一六機もついにタラワへは到達せず、九機が還らなかった。

マキン島三日間の戦闘の間、敵の一機といえども島上に達したものはなかった。タラワには小部隊が二回島に達しただけであり、しかも損害を加え得なかった。荷役は、敵機のために一度といえど妨げられたことはなく、太平洋の上陸作戦に新記録をつくった。ギルバートにおいては、十一月二十一日、空母「インディペンデンス」に魚雷一本を命中させたのが敵機の挙げた全戦果であった（『モリソン戦史』）

二十二日以降も、わが基地航空部隊は、二十九日まで四次にわたって延べ一〇五機による果敢な攻撃を続行したが、その必死の善戦にもかかわらず、たちまちのうちに戦力を消尽した。

大本営は、四回にわたって赫々たる大戦果を発表したが、ブーゲンビル島沖航空戦にかぎらず、その後の航空戦でわが方の挙げた戦果発表は、つねに過大であった。一連の『ギルバート沖航空戦』も、その例外ではない。

〈第一次〉（一九日～二二日までの戦果）
撃沈＝中型空母一、駆逐艦一、大型空母二（内一は沈没の算大）、中型空母一、戦艦（もしくは巡洋艦）一、輸送船一、撃墜一二五機
〈第二次・第三次〉（二五日未明と二六日薄暮の戦果）撃沈＝空母四、巡洋艦二、撃破＝空母一、巡洋艦二
〈第四次〉（二九日薄暮の戦果）
撃沈＝空母二、艦種不詳二、
撃破＝大型巡洋艦一

以上の戦果を総合すれば、空母だけでも八隻撃沈したことになる。しかし米側資料（キング元帥報告書）によれば、「敵の空襲もあったが、わが航空部隊はこれを撃攘した」とだけ記されており、上記の戦果はいずれも誤りであることが判明している。

確実な戦果といえるのは、二十五日午前一時半、配備中のわが潜水艦「伊百七十五潜」（艦長・田畑直少佐）が、マキン西北西約二〇浬に米空母一隻を発見、二時十分、これに魚雷を撃ち込んだことであろう。同空母――護衛空母「リスカム・ベイ」は魚雷を中央部に受け、格納庫内に貯蔵中の弾薬が炸裂、被雷後二三分で沈没、乗組将兵九〇〇名のうち六五〇名が戦死した。

しかし、同方面で作戦した潜水艦のうち伊号第十九、第二十一、第三十五、第三十九、呂号第三十八潜はいずれも未帰還となった。

――ギルバート奪回作戦もまた、不発に終わった。

古賀長官は、同月二十二、二十四日の両日、ポナペ駐屯の「甲支隊」（歩兵第百七聯隊本部・歩兵一コ大隊・山砲一コ大隊基幹の約一五〇〇名）をギルバート増援部隊として派遣すべく、軽巡五十鈴、那珂と駆逐艦二隻をトラックからポナペに回航して同部隊を分乗させ、二十六日クェゼリン環礁内への集結を完了した。

また主力をクェゼリンに、一部をウオッゼ、マロエラップ、ミレに配備中の「南海第一支隊」（九月上旬マーシャルに進出・既述）も、ギルバート作戦参加の出撃準備を整えつつあった。だが、時すでに遅く――米軍側はマキン守備隊（二十三日）、タラワ守備隊（二十五日）の玉砕を発表し、二十七日にはアパママにも上陸し、同島を占領した。

「Z作戦」の好機はついに到来せず、ギルバート諸島は、完全に米機動部隊の勢力圏に入り、逆上陸はもとより、聯合艦隊主力をもってする決戦のチャンスはすでに去っていた。

古賀長官は、ギルバート奪回を断念し、同方面への陸軍部隊の増援を中止するとともに、十二月四日「丙作戦第三法」の終結を下令し、主力および遊撃部隊は翌五日トラックに帰投した。

――聯合艦隊は、とうとうギルバートには姿を現わさなかった。

「しかし、それら航空機のほとんどすべてがラバウルやブーゲンビルで失われた結果、艦隊航空兵力はほとんど全くなくなってしまいました。ギルバートの戦闘こそ、最後の決戦チャンスと思われていましたが、いかんせん、艦隊母艦群は頓むに足らない兵力だったので、タラワ、マキンにはほとんど増援できませんでした。艦上機の完全に近い損耗は、日本海軍の命取りでした。それを補充するのに最小限六カ月を必要とするので、その整備完了は昭和十九年の五月ないし六月になると思われ、それまでは母艦兵力を伴うどんな作戦も不可能でした。ギルバート、マーシャル作戦に関する作戦計画は改訂されました」（福留中将の証言記録）

十分な母艦航空隊を持たないトラック在泊の聯合艦隊は、その大艦巨砲も為すところなく、徒らに東の空を仰いで嘆息するばかりであった。（淵田美津雄・奥宮正武共著『機動部隊』）

それにしても――、〝孤立無援〟の守備隊将兵は、よく奮戦力闘した。

守将・柴崎恵次海軍少将をして「百万人の敵を以て百年かかっても難攻不落」と豪語せしめたタラワの防備も、約五〇〇〇名在島将兵の昼夜兼行の猛訓練も、圧倒的な米攻略部隊の敵ではなかった。そして恐らく、西の水平線を見つめては「聯合艦隊はまだ救援に来てくれないのか」と思いつづけ、最後の一兵になるまで戦って果てたのであろう。

米軍が「恐怖のタラワ」と呼んだように、堅固な防御陣地を擁したタラワ守備隊の死闘は凄絶を極めた。海兵隊も一〇〇〇名以上の死傷者を出し、サンゴ礁の島は、文字どおり両軍将兵たちの紅い血汐に染まった。

米海兵隊『公刊戦史』は、このタラワ戦と二十年春の硫黄島上陸作戦が、米軍にとってもっとも損害の多い戦闘であったと記録している。

大本営は、約一ケ月後、タラワ、マキンの玉砕を発表した。（傍線筆者）

大本営発表（昭和十八年十二月二十日十五時十五分）
タラワ島及びマキン島守備の帝国海軍陸戦隊は十一月二十一日以来、三千の寡兵を以って五万余の敵上陸軍を邀撃、熾烈執拗なる敵機の銃爆撃及び艦砲射撃に抗し、連日奮戦、我に数倍する大損害を与へつつ敵の有力なる機動部隊を誘引して友軍の海空作戦に至大の寄与をなし、十一月二十五日最後の突撃を敢行、全員玉砕せり
指揮官は海軍少将柴崎恵次なり
尚両島に於て守備部隊に終始協力奮戦せし軍属約一千五百名も亦全員玉砕せり。

ギルバートの失陥によって、マーシャル→カロリンを経てフィリピンに到達せんとする連合軍の新たな進攻路は俄かに現実味を帯びてきた。

――そして、ちょうどその頃、満州で編成を終えた『海上機動第一旅団』の将兵は、十二月七日～九日に各駐屯地を出発して釜山に集結を完了、同月十四日には『丁船団』第一分団の輸送船「但島丸」「日美丸」に分乗して釜山を出動、駆逐艦三隻に護られながら、風雲急を告げる遙かマーシャルのサンゴ礁へ向かいつつあった。（以下次号）

ブラウンへの想い

寺西　ヒサ

拝啓、このたびマーシャル方面遺族会の慰霊祭、直会に参加させて頂き有難うございました。久し振りにお会いする方々や快晴に恵まれたスカンジナビアの船内の食事、美しい富士山を背景に一つ家族の様な良い方々ばかりの和気藹々の旅は本当に心和む素晴らしいものでした。

三島駅頭で再会を願いながらお別れして今回のもう一つの願いであった三ケ根山の慰霊碑にお参りするべく、長女淑子と二人車上の人となり蒲郡着。タクシーにて三ケ根山頂上着は四時十分頃でした。矢野雄三様から殉国七士のお墓の隣とお聞きしていましたが運転手さんの話では、慰霊碑が沢山あって分かりにくいのではといわれ、時間的にも余裕はなく心配しましたが、降りてすぐ淑子が見つけました。

戦死後一枚の紙切れの公報だけで以後四十数年詳細不明、今にしてやっと巡り会えたと言うか、お参りすることができ、傍らの碑誌を読み思い当る事多く、もう胸が一ぱい。家から持参したお水、お米を供えただただ感無量、涙涙で碑に縋って泣きたい思いで般若心経を読誦しました。四十数年前、満州牡丹江でお別れした在りし日の姿が偲ばれ走馬燈の様に当時の事があれこれ鮮明に去来するのでした。

山上の風は啾々として私共親子と一緒に泣いてくれている様です。陽は落ちあたりの人影はまばら、立ち去り難い思いで下山しました。

私の夫、寺西正俊（当時准尉）は支那事変転戦後、昭和十四年秋に内地帰還し、原隊は金沢山砲隊の現役軍人で昭和十五年十月、再び満州牡丹江駐屯第六九〇部隊となり私も十六年渡満牡丹江の官舎で暮しておりました。

昭和十八年四月、ソ満国境老黒山へ第一大隊と交代のため転出、私は幼子二人（長男二才五ケ月、長女一才）と他の家族の方々と共に残り、老黒山に官舎の出来る日を待ちわびていました。そして愈々十一月中頃、官舎も出来て荷物も送り汽車の切符も買って十九日、出発の直前になって中止。軍令に依って転属するとの事でした。そして二十三日朝、牡丹江の六九〇部隊に帰り二十五日朝出発。その二日間の慌ただしかった事。子供達は別れていた父が珍しく、交る交る足許にまつわりついて、抱いて高く差し上げて貰うのが嬉しく、もう一遍もう一遍とねだるのでした。

当時は何事も極秘で行く先も言わず私の幼子を連れての内地帰還ばかりを案じて発って行きました。そして昭和十八年十二月十一日付け釜山からの便りと暑い所へ行くから不要と送って来た防寒衣料の荷物の木札が白城子第八〇五部隊だったのです。

その後十二月二十六日付（横須賀郵便局気付ウ五〇駆第三一三三部隊）と二月に便りが届いたのが最後でした。その時の歌です。

たらちねの父母在ます国おろがみて
　心静けく　決意告げなむ
大濤にゆられし我はよひもせず
　海のをの子となりにけるかも
わだつみの大海原に陽の入らむ
　熱風凪ぎて軍歌どよもせり
下り立ちしこの□こそは我と共
　永遠に生くべき日の本の□

その後昭和十九年六月十九日に東部第二十三部隊長から「昭和十九年二月二十四日、中部太平洋方面ブラウン島嶼エンチャビ島において敵の攻撃を受け死体収容せざるも戦死と認定せられ候」の報があったきり以後、詳しい事は何一つ判明せず四十数年の空白。

その間、長男は富士市へ遺骨を迎えに行って風邪を引いたのが元で可愛い盛りを死亡させ、義父は力にしていた長男の戦死でショックを受け心臓を悪くして死亡、涙の多い日々でした。

一昨年、環礁第五十号に記載の矢野様の記事によって木札の白城子第八〇五部隊に編入されたのも分かり、三ケ根山に慰霊碑のあるのも判明、こうして娘淑子と二人お参りする事が出来て本当に有り難うございました。心から厚く御礼申し上げます。

敬白

二月十六日

（富山県福野町田尻二一〇）

夏の夜の光の祭典
靖国神社のみたままつり

恒例の靖国神社のみたままつりが次のとおり行われます。

△　七月十三日から七月十六日の四日間
開門午前五時　閉門午後十時

△　昇殿参拝希望者は四日間とも午前九時から午後八時まで参集所受付に

△　四日間とも午後六時から祭典が行われます。参列希望者は五時四十分までに参集所受付に。

△　神賑行事　毎日午前十一時から午後八時迄各種の催し物で賑やかです。

△　本会は毎年「みたままつり」に協賛のため大型献灯一個を奉納し御霊をお慰めしております。

弔　浮田名誉会長

浮田名誉会長は一昨年二月以来入院加療中のところ、去る一月十四日八十九歳を以て逝去されました。

浮田様は、海軍大佐として終戦を迎え、引続いて横須賀地方役員部長や厚生省援護局業務第二課長として復員者や遺族の援護に努められました。

昭和三十八年遺族会結成の折には戦歿者とその遺族の調査、原票作成の大仕事を殆どお一人でやり遂げ、三十九年二月六日、感激の二十年祭が斎行されました。

全国から集った八〇〇余名の遺族の多くは、肉親が何時、何処で、どのようにして戦死したかを全く知らなかったので、初めて真相を知り、同じ境遇の仲間達と知り合った感激に、お互いの精進と戦歿者の慰霊を誓い合ったことでした。

その後の浮田様の献身的な奉仕の数々は会報「環礁」で御承知のように、文字通り本会の育ての親でありました。その誠実なお人柄はすべての会員から敬慕され、遺族会存立の中柱でありました。

御葬儀、告別式は、一月十八日正午から御自宅で桜代（はなよ）夫人が喪主となって神式で行われ、本会関係者始め生前御縁のあった各界の方々が大勢お別れに参じました。

（佐藤宗丕）

弔　辞

謹んでマーシャル方面遺族会名誉会長浮田信家様の御霊に申し上げます。

貴方は昭和三十八年本会結成以来二十六年余の長きに亘り至誠一貫只管戦歿者慰霊奉仕に盡瘁されました。中でも二十年祭準備の一環として厚生省の御厚意を得て作成されたマーシャル群島及びギルバード諸島の戦歿者三萬五千柱の原票は本会にとって又と得難い至宝となっております。

更に昭和四十二年中六か月間の長期間困苦欠乏に堪え南洋群島の戦跡を隈なく尋ね遺骨収集慰霊現地調査の大任を果たされたほか慰霊碑建立慰霊団派遣の途を開かれたことは私共の感謝鑽仰するところであり靖国の諸霊も定めし御感応のことと拝されます。

私共は貴方の点じられた戦歿者慰霊の清らかな灯を絶やすことなく点しつづけることが貴方に御報いする只一つの途であることを確信し清き明き心を承け継いでゆくことを茲にお誓いいたします。

本日永久のお別れに際し改めて在りし日の数々の御業績と折々の温容を偲び哀惜の情切々と胸に迫り来るを覚えます。

茲に全国の本会会員を代表し謹んで哀悼の意を表するとともに御霊の永えに安らけく神鎮まりますことを御祈り申し上げます。

平成二年一月十八日

マーシャル方面遺族会
会長　佐藤　宗丕

浮田さんと復員援護業務

特別縁故者・前篤志会員
村岡　達志

浮田さんは、昭和二十年十二月海軍省が廃止解体されて第二復員省に移行した際、本省の人事局に勤務しておられましたが、その後海軍の復員や戦没者ご遺族の援護等の仕事が復員庁、引揚援護庁、厚生省へと引き継がれていった間の約十二年間この関係の仕事に従事して来られました。その間昭和三十年までは、横須賀地方復員部長として、またその後の二年間は、厚生省援護局業務第二課長として、海軍関係のこれらの業務を担当されました。

戦後昭和二十七年まで、日本は連合国軍の占領下におかれ、その占領政策にもとづき日本軍に関係し協力した者に対しては、徹底的に痛めつけるという方針の下に行政が指導され、又従軍者があたかも犯罪者であったかのような宣伝が行われましたので、いわゆる反国家的、反軍的な風潮が国内にみなぎり、軍の残務処理や復員援護の仕事に対する風当たりは極めて強く、この仕事に従事する者の苦労はとても生易しいものではありませんでした。

しかし、浮田さんとしては、我が国の再建を果たすためにも、国家の犠牲となられた戦歿者やそのご遺族の方々に酬いるこのような仕事こそ先ず第一にやらなければならない仕事だという信念の下に、あえて踏みとどまり、苦難に耐えながら、この仕事の完遂に頑張ってゆかれたのでありました。

この間に果たされた浮田さんの業績について詳しく語ることは、残念ながら紙面の関係上割愛いたします。

浮田さんは、退官後もマーシャル方面遺族会の創設、運営のため、これ又大変なご努力を払われ偉大な業績を挙げられましたが、そのことについては別の方がお述べになると思いますので、省略させていただきます。

私は、たまたま終戦当時海軍省経理局に勤務していて、その後同じように海軍の残務処理や戦没者ご遺族の援護等の仕事に関与いたしましたので、浮田さんとは、段々顔をあわせる機会が多くなり、最終的には、浮田さんから厚生省援護局業務第二課長の職務を引き継ぐことになりました。従って私は

個人的に浮田さんから賜わった格別のご指導ご援助に対し深く感謝しておりますが、同時に国民の一人として、浮田さんが長期間困難な環境下において、苦難に満ちた軍のあとしまつや戦没者のご遺族の援護等の仕事に身を挺して誠心誠意尽瘁されたご功績に対し心から敬意を捧げる次第でございます。

（〒156　世田谷区桜三―十二―十三）

浮田前会長を偲んで

篤志会員　土屋太郎

浮田様に初めてお会いしたのは昭和三十九年二月の二十年祭のときでした。このとき浮田様は遺骨収集と現地慰霊、建碑という三目標を提示されました。当時の状況から考え、私などはそのどれもが夢のように思えましたが、ひとえに英霊と遺族のことを思われるお心がひしひしと伝わってきて、無事生還したわれわれは遺族の方以上にお尽くししなければならないと感じました。

その頃、私の文通していたKSウィリアムス氏は、ケゼリンは重要な軍事基地ではあるが遺族が同地を訪れることを拒む理由は全くない、といってきました。米海軍に勤務する一文官の言葉に何の権威もないでしょうが、九月会合のとき、そのことを皆様に紹介しました。この頃、運悪く同基地の所管が海軍から陸軍に変わりましたが、ウィリアムス氏はその陸軍司令官に、われわれ遺族会の希望を伝えるとともに、その司令官の宛先をわれわれに知らせてきました。そこで浮田様は正規のルートで交渉を進められると同時に、現地司令官とも直接連絡をおとりになりました。わずかな情報も見逃さずあらゆる努力をなされた一証左ともいえましょう。

浮田様佐竹様のお二人が初めて現地慰霊に出発される少し前の四十二年三月、盛大な壮行会が行なわれ、私も同席させて頂きました。今では割合容易に飛行機が利用できるようですが、そのときは往復とも船便で、向こうへお着きになってからは、いつ出るとも分からない各島巡りの物資収集船の便を待つほかないとのことで、実に半年にも及ぶ長旅でした。浮田様はとてもお元気な方でしたが、すでに還暦をはるかにすぎておられ、万一病気になられたらということも懸念されていました。

そういうこともあって、現地にお出でになっているとき一度見舞のお手紙を差上げました。すると元気でいるとのことで、一字々々丁寧な文字で、島々の様子をくわしく、それこそ航空郵便書簡にぎっしり書いてお知らせ下さり、かえって恐縮しました。そのお手紙は今も大事にしまっています。

会長を辞任されて間もなく、浮田名誉会長に感謝する集いが催されたときも多くの参加者がありましたが、これは全く浮田様が残された数々の業績とそのお人柄に対する敬意の念の表れと思います。

本当にちょっとお目にかかっただけで心が温まるようなお方でした。

浮田先輩を偲ぶ

篤志会員　長谷川栄次

先輩には兵学校生徒以来お世話になっていたが、特に世話になったのは戦後私が水交誌の編集を担当した時からである。あの当時遺族会の記事を掲載する時にはいつも先輩のアドバイスを受けていた。最初は先輩が遺族会の事に関して詳しいので不思議に思っていたが途中で先輩が海軍時代から引続き厚生者と深い関係があった事を知り、なるほど、そうだったのかと感心、以後益々色々の事で指導を受けた。

又こんな事があった。それは戦前に私が中央当局からルオット島の調査を命ぜられ調査の結果陸上飛行場適と上申、これにより飛行場完成の経緯あり、然るに開戦後玉砕という悲劇。私はあれを耳にした時愕然。飛行場が無かったら玉砕しなかっただろう。飛行場適と答申したばかりに玉砕。何だか私にその責があるようでご遺族には相済まぬような気がしていた。依って当遺族会にも加えて頂き、ご遺族をお慰めしたく今日に至っている。

現在遺族会は各地に結成されているが当会ほど早く結成され、且つガッチリと組んで慰霊の実を上げている遺族会は珍らしい、又当会の運営方法を手本にしている遺族会もある。

こんな立派な遺族会に成長し且つ盛大に維持運営されているには色々の理由もあろうが最も顕著なのは浮田先輩の結成以来のあらゆる努力、更には会長まで担任される等、全力を傾注された結果によると申しても過言ではない。

これを思いあれを考える時、後に残った我々は先輩の意志を充分に受け継いで今後之を継承する事こそ先輩のご意志に報ゆる手段でもある。こゝに先輩の一端を述べ追憶の辞としたい。

浮田さんを偲ぶ

篤志会員　横溝幸四郎

一月十四日厚生省から浮田様（長いお付合いのこととて「浮田さん」と呼ばせてください）の訃報に接し、かねてから重い病気と聞いておりましたので、矢張り天命かと思う反面、マーシャル方面で戦没された方々のために尽くされた数々のご活躍の跡を偲び、しばし言いしれぬ淋しさに浸りました。

浮田さんは、私より兵学校では十五期も上の大先輩で、海軍時代はお目にかかる機会も全くありませんでした。それが終戦により海外諸戦域で生死不明となった方々の調査が開始され、以来この調査究明を共にすることになりました。時期は忘れましたが、海軍関係の関東地区究明会議が茨城県袋田温泉で行われた際、終了後に地元県の課長（陸軍の方）を交えた懇親会が開かれました。ところが、時間がきたのに

浮田さんと陸軍の方が席につかれない。何か問題でも起きたのかと皆で捜し廻ったところ、大きな湯舟の中でお湯をかけ合い、子供のように喜んでいるお二人を見付けたという次第でした。

このとき、日頃関係の薄いはずの陸軍の方とこうも親しく接しうるものかと浮田さんに言いようもない驚きと尊敬の念さえ感じたことを今なお鮮やかに思い出します。陸海軍の別にこだわすず、マーシャル方面遺族会をまとめられ、自ら小船で東太平洋をかけ巡り、役所ではむずかしい現地司令官等との個別接渉に至るまで体を張って尽された業績は、正にこの人、浮田さんにして初めて為し得たものではないでしょうか。

いつも笑みがこぼれるような温顔で接してくださった浮田さんを偲び、今はただ、み霊安かれと祈るのみです。

想い出

篤志会員　石井　清

東太平洋の孤島マジュロ島（別名真珠の首飾）に日本政府は一九八四年（昭和五十九年）三月「東太平洋戦没者の碑」を建立し、御遺族はじめ関係者参列のもと盛大に「竣工並びに追悼式」を行ない併せてその周辺の慰霊巡拝を実施した。

その前年、私は相手国関係者と碑の建立場所などの打合せのため二人で現地に出張することとなったが、その頃はマジュロ島に関するガイドブックなどはほとんどなく心細い思いをしていた。或る日人伝てに名誉会長は現地にも詳しく知人も多いという話を聴きお願いしたところ、こころよくお引受けいただき知人に手紙を出して下さることとなった。

私達の現地到着は真夜中であったが、その方が空港に出迎えてくれ滞在中も案内を買って出てくれるなど面倒をみていただき無事に職責を果たすことができた有難かった想い出がある。

もう三十年以上も時は流れているが、二復時代（第二復員局残務処理部）は春になると名誉会長宅の庭の桜の宴、夏には多摩川の花火見物などの楽しい想い出もある。

忘れられないのは、何かと理由をつけて課員でよくお酒を飲んだことである。名誉会長はたまには酒に飲まれることもあって、山手線をぐるぐる廻ったということがあったようである。すると翌日は奥様から電話があって、午後になるとお菓子を持って「昨日は大変ご迷惑をおかけしました」という御挨拶をいただいた懐しい想い出もある。

御冥福をお祈りいたします。

嗚呼　浮田信家様

元靖国社権宮司　鈴木　忠正

一月十五日の佐藤会長さんからのお電話にわが耳を疑いました。あの浮田さんがと思った時、涙がとめどなく出るのをどうする事も出来ませんでした。

靖国神社を媒介に、五十年の長いご交際を頂きました往事の一つひとつが今、次々と思いうかび、故人に対する想い出は尽きません。

私も浮田さんと同じように、一昨年から大病をいたしました。脳腫瘍と肺癌が同時に私を襲い、一命はとり止めましたが、話すことも、字を書くことも思うに任せず、浮田さんのお見舞にも御葬儀にもお伺いできず、残念でなりません。

浮田さん、長い間御苦労様でした。安らかにおやすみ下さい。

浮田さん　さようなら

（在ハワイ）　徳原　徳子

篤志会員　徳原　勇

昭和四十二年の夏、マジュロで浮田様と初めてお目にかかった時、私どもは結婚を間近に控えていました。浮田様のお嬢様も同じ頃結婚なさったと記憶します。

これから各地を慰霊してまわろうという佐竹様共々悲壮な御覚悟で長旅をなさり着いたばかりであったにもかかわらず、楽しく話がはずみました。

何もかもうまく行き、結婚式とも重なりお目出度いことずくめでした。

私共のマーシャルでの思い出は、そのまゝ浮田様との親交の思い出です。

日本を訪れる度に私共は心からの、おもてなしを受けました。お目にかかればマーシャルでの思い出話ばかり。

あの頃浮田さんは相当の高齢（六十七歳）にもかかわらず大そうお元気で、「船酔いなどは知らない」と云われ、酔って青い顔をしていた人達を笑っておられたこともありました。慰霊の時にはピンと背すじを伸ばされ、弔辞を声高々と読まれていた、あの声が未だに耳に残っています。

昭和四十三年の十一月、クェゼリンに慰霊碑を建てる時、仲間達が絞るような汗の中での作業、又明りのない場所であったため、手さぐりで現場から戻ったこともありましたが、浮田様や遺族会のみなさんの喜ぶ顔を思い浮べ楽しい作業でした。

今思い出すと、不思議と何もかも楽しいことばかりのような気がします。

悲しむよりも思い出話に花を咲かせ楽しい話題をしたいと思っています。

（在ハワイ）　ナカタ・イサム
特別縁故者

浮田サンノ　スバラシイ人生ヲ　モノガタルヨウナ　リッパナオソウ式ノヨウスヲ　知ラセテ下サイマシテ　カンシャシテイマス

オクサンヤ　カゾクノミナサン　マタカイインノミナサンノ　オナゲキガ　オモワレマス

私等夫妻モ　二十年以上ノ　長イオツキアイデ　カナシイデス

ゴセンゾサマヲ　大セツニスル人ハ　長イキシマス

慰霊祭参列者芳名

（敬称略）

今年二月十一日の慰霊祭に次の皆様が参列されました。氏名は本人が出席票に署名した通りになっておりますので、参列しても署名しなかった方は、載せてありません。

参列された方は一八〇名ですが、氏名のわからない方が三名ありました。

青森県　塚原　ハナ　須藤　明子
宮城県　松木　孝子　高橋とし子
秋田県　加藤　かよ　石田レイ子
福島県　冨田　ミツ　冨田　君子
鈴木ヨシエ
茨城県　安藤　啓次　安藤　やす
菅　かつ子　松本キヨ子　若狭　久男
浜田つき子
栃木県　菊池　彦亘　高橋　克磨
埼玉県　秋本　英郎　秋本　清子
北原ひで子　桜井　かね　小林　孝
千田　恒子　千田　晋作　千田美耶子
千田　保夫　野田　雅子　服部　陽一
藤田　清瀬　山下　ミツ　井沢　なを
植田　和明　小田原利子　小野　博孝
桜井　義一　斉藤こずえ
千葉県　相川　孝夫　岩佐　とみ
石川　きみ　浄永　孝　津久井艶子
豊谷　秀光　豊谷美恵子　芳賀タツエ
横浜　福居　谷沢　英子　広原　チヨ
野田　喜一　野田　精子
東京都
荒木　常子　石谷　典夫　猪飼　トミ
内海　静枝　内海　淑子　江間正二郎
遠藤　安男　大給　湛子　大石　潔
大石　美子　押谷　義雄　黒川　誠
黒川　直吉　栗原　利雄　小山キミ子
佐竹　エス　斉藤耕太郎　斉藤　幸江
斉藤　芙美　篠崎　英夫　白井　正子
白井　勝年　白井小夜子　白井　正恵
菅沼　昇　関口仙之助　高林　芳夫
滝　知道　滝　崇江　高橋　鎮夫
高橋かつ江　佃　喜美　中村　久
中田　テル　大野　清子　長尾　静子
中田　わか　沼山　正英　蓮尾　諭吉
小林　法子　青木　利一　佐藤　宗丕
昼間　楽平　昼間志津子　水野　はな
水野　薫　村上　義博　村上　芳江
村上　康子　森田　穣二　山森　久江
安井　文子　吉村ヨヨミ　奥村ムツミ
柳沢　正雄　田中　猛　佐藤　ナヲ
神奈川県　赤坂　スズ　岡野　正文
大石　純一　大石　岳男　大石美代子
片山　計　宍戸献吉郎　宍戸　偉
鈴木　孝輔　杉田　絹恵　土屋　太郎
十二　徳二　岩田とし子　片桐　温子
内藤つる子　吉田みさを　米倉　章
米倉　正江　川島美恵子　西田　恒子
久保田光子　徳田　叶子　榎本　益明
榎本　幾子　西森サツキ
新潟県　青木　謹次　江村　源次
片桐　さき　斉藤キクノ　斉藤美和子
斉藤　得三　小林　正道　渋谷セキノ
米田　トシ　橋本　淑子
富山県　池田　淑子　池田　幸夫
寺西　ヒサ　村梶　光栄
福井県　田賀　將一　田賀　朋子
田賀　英子　田賀　茜　田賀　奨
田賀　護
山梨県　望月とよ子
長野県　伊藤ますの　山田　二美
岐阜県　渡辺　三三
静岡県　服部くにゑ　三浦　たき
山田　登世　池田　マサ
愛知県　大森　すず　川越　コウ
浜田　芳枝　山下　治　山田　あき
松尾　正輝　松尾　淑子
京都府　谷　正文
山口県　坂本ヤスヱ
香川県　秋山百合子
福岡県　金子庄之助　金子サヨ子
橋本マサヱ　平田　郁子
長崎県　井上　義夫　前田　フサ
宮崎県　高橋　重美
大分県　吉良　正義

（6頁より）

遺品、遺毛、遺爪等と手紙の発送を許可される。各戦士達は南十字星輝く星空を眺めながら、思い思いの気持ちを此の一通の手紙に書き綴った。これが故郷の肉親、友人に対する此の世の最後の便りになろうとは、誰も考えていなかったであろう。

旅団は十二月三十日「木」第二分団（南洋第二支隊）と別れマーシャル群島に向かう。洋上にて、昭和十九年の正月を迎える。一月元旦昼、船上に於て旅団各部隊指揮官の会合が行なわれ、その席上旅団長　西田祥美閣下は下記の歌を作り披露する。

巡り来る春を迎えて南海に
　波頭を蹴って吾は征くなり

昭和十九年一月四日「火」海上機動第一旅団主力「機動第一大隊、第三大隊、機関砲隊、戦車隊、工兵隊、衛生隊の主力」はマーシャル群島エニウエトク環礁ブラウン島、メリレン島、エンチヤビ島に各々上陸防備に就く（海上機動第一旅団主力は同島防備中昭和十九年二月二十四日、来攻した米軍に対し激戦を展開、西田旅団長以下全員壮烈な最後の突撃を敢行し玉砕する）

機動第二大隊主力及び第三大隊第七中隊「中隊長　露木大尉」並びに配属の工兵隊、通信、衛生隊の一部は昭和十九年一月八日ブラウン島を出港、駆逐艦「海風」「海潮」に護衛され一月十一日クエゼリン環礁に到着、ウォッゼ島、マロエラップ島に展開配備中の南洋第一支隊第二大隊と配備の交代を致す予定であったが、両島への船団による前進が困難な状況と判断、護衛の駆逐艦をもって一月十二日早朝　大隊本部先発員　十名　（大隊本部付　塚基治大尉（後少佐）　西沢憲郎軍医少尉、星野主計曹長、波多野曹長以下六名）

第四中隊　一九六名　「中隊長　秋元輝夫大尉、指揮班長　菅原三郎准尉、第一小隊長　吉村正嗣「旧和田」中尉、第二小隊長　片桐武夫准尉、第三小隊長　梶　敏明小尉、機関銃小隊長　安田勇治曹長

（以下次号）

名簿訂正 (4)

◎ 昭和63年7月1日発行の会員名簿を次のとおり訂正いたします。

〈頁〉	〈氏　名〉	〈訂　正　事　項〉
35	荒谷美佐男	住所を　湊高台3—8—12と変更
	田中ロク	死亡により　同住所　子　田中正治 が継承
	本堂テフ	住所を次の通り変更　〒031 八戸市白銀台3—6—10 小田方
36	鈴木マツ	死亡により　同住所　兄　鈴木伊佐男 が継承
	松木孝子	住所に　太白区を追加
37	奥山キノ	住所を　鷹巣町栄字太田新田77—4　と訂正
	小前ミヤ	東京へ移転
38	冨田ミツ	戦歿地をブラウンと訂正
	古市光男	古市モトと訂正
42	菅井せい子	死亡により　同住所　長男　菅井　雄 が継承
43	千田恒子	住居表示を　川口市北原台1—13—14 と変更
	岩佐とみ	戦歿者　清司 を靖司と訂正
48	小泉文江	住所を　池袋1—7—10と変更
	鮫島みさを	退会　新潟市 根津やい が継承
51	安井文子	住所・電話を　中野区大和町2—46—2—A　☎338—0383 と変更
	森田穣二	の次に新会員を追加
	青木利一	〒190—01 西多摩郡日の出町大久保3185　☎0425—97—0917 兄　青木源市 ブラウン 陸軍
	小林法子	〒171 豊島区千早町4—5—1—10　☎03—974—2560　長女　小林　純 ウオッゼ 海軍
	浜田つき子	〒104 中央区月島3—13—1　☎03—533—8120　子　若狭　光 クェゼリン 軍属
	(秋田より移転)	
	小前ミヤ	〒132 江戸川区西瑞江2—37　妻　小前和一 ナウル
52	岩瀬石松	死亡により　同住所　姉　岩瀬トシ が継承
53	佐藤登志	住所の戸塚区 を栄区 と変更
57	根津やい	950-21 新潟市坂井砂山2-7-20　姉　安中芙美雄 ブラウン 3130
	池田淑子	住所を　福光町1624—2　と訂正
58	寺島きよ	同住所　寺島芳男 が継続
59	柳沢清信	の次に追加
	塚田耕治	〒961 鯖江市吉江町12—12　弟　塚田重一 ブラウン 3138
62	沢田ミツエ	名を ミツエに、住所を　東海岸1—11 四季の宿小林や と変更
64	鈴木麗子	〒を　441 と変更
65	小寺洋子	住所・電話を　〒552 彦根市原町850—186　☎0749—24—6806 と変更
	川本ユキエ	死亡により　同住所　弟　川本彦次 が継承
	小林さと	死亡により　同住所三男　小林卓也 が継続
67	山野イクエ	住所を　明石市大久保町380—5　と訂正
69	大上八重子	死亡により　同住所　子　福場隆義 が継承
	三沢キヨメ	住所を　大野町甲1619洗心園 と変更
79	宗像政敏	の次に新会員を追加
	青山次則	〒862 熊本市帯山4—1—13　☎096—382—6477　弟　青山久則 マロエラップ 252空
84	押谷義雄	の次に新会友を追加
	吉良正義	〒870—11　大分市光吉1600—41　☎0975—69—1220 クェゼリン
	植松喜一	〒275 習志野市谷津5—8—23　☎0474—72—4641 ウォッゼ64警
85	松平永芳	住所を　中目黒5—7—28—302 と変更

寄付者芳名

次の会員及び会友の皆様は年度会費を完納された上更に慰霊奉賛のため浄財を御寄付下さいました。厚く御礼申し上げます。
今後とも本会の永年存続のため何分の御協賛を切にお願い申し上げます。

（敬称略・順不同）

北海道　白山光枝子　岩川　あい　宮崎　実　豊谷美恵子　石川　きみ
青森県　小笠原岩勝　塚原　ハナ　広原　チヨ　吉田ヤヨイ　川間　つね
池田　精治　田中　正治　小笠原　広　東京都　坂本美枝子　渡辺　妙子
菅井　光　本堂　テフ　本橋　とき　荒木　常子　黒川　誠
岩手県　小杉　リサ　六軒つる子　高林　芳夫　佐竹　エス
宮城県　平形いせこ　高橋とし子　中村　久　長谷川智子　間々田やす
松木　孝子　新田冨美子　番場　信子　佃　喜美　遠藤　安男
秋田県　近藤キクエ　奥山　キノ　出口　スエ　水野　はな　栗原　利雄
小室舜司郎　関山富一郎　態谷サタヨ　原　富子　江間正二郎　小泉　文江
佐藤　敏子　相馬　ツキ　小池　勇二　菅谷きよ子　鈴木梅太郎
山形県　大場美津子　秋保　十郎　昼間　楽平　大石　潔　斉藤耕太郎
丹野　アサ　青木　利一　小林　孝　小山キミ子
福島県　冨田　ミツ　吉津ミドリ　飯島　祐宣　小前　ミヤ　飯島浩一老
茨城県　大熊　正美　堀江　誠一　谷梯　初江　高橋　鎮夫　国松ふみ江
神谷　和枝　倉橋　たみ　安藤　啓次　鈴木つな子　安井　文子　山口　裕子
若狭　明光　大島　か乃　石谷　トシ　菅沼　昇
栃木県　猪瀬　ナカ　吉川　芳蔵　竹本　正平　沼山　正英　佐藤　宗丕
木村恒三郎　田名網武夫　木村　常七　内海　静枝　五十嵐孝三
群馬県　園部　重太　神奈川県　川名　茂子　三村ともよ
埼玉県　長谷部なを　山下　みつ　木俣ミサヲ　柳田　国雄　岩瀬　トシ
北原ひで子　福島　レイ　宇田川ひさ　岩田とし子　栗田千代子　熊沢　静子
柴田　貞子　小田原利子　藤田　清瀬　鈴木　リン　金子　武晴　赤城とみ子
小野　リエ　近藤マスエ　秋本　英郎　露木　千鶴　西森サツキ　伊沢　ヤス
小谷中せい　井沢　なを　吉田　よね　吉田ミサヲ　石渡　綾子　吉水　梅子
千葉県　高山　貞男　桜井　一正　鈴木　基史　鈴木　孝輔　渋谷　良雄
浄永　孝　谷沢　英子　宮本　豊吉　沖立　キヨ
加瀬　よし　祖田　弘光　津久井艶子　新潟県　山田　正三　藤田　ヨリ

渋谷セキノ　佐藤　フジ　高林　セキ　岡山県　中島　清子　浜田　数江
坂井　繁男　小林　正道　青木　謹次　金子ミサヲ　宇山　アサ
松岡　イキ　高野　清　片桐　さき　広島県　松本タカミ　田口マサヨ
富山県　中林　ちよ　寺西　ヒサ　小林アヤ子　植田　敏祐　奥井　礼子
池田　淑子　広島　富子　棚橋　昭二　溝口ハナコ　内富ミツヨ　道源　ヒサ
柴田外美子　村梶　光栄　金山　深雪　山口県　山田チヨコ
本多喜久江　下村チエ子
石川県　吉光　澄子　佐々木久子　徳島県　栗本　孝一　坂本　栞
前田　ナカ　高畠　芙容　香川県　奥田　和広　松原ユキエ
福井県　青木みねを　鳥羽　春枝　冨田トシ子　秋山　武
柳沢　清信　田賀　將一　三重県　近沢　あき
山梨県　塚田　民子　中山　いよ　愛媛県　大塚喜久雄　三好　邦博
黒川　正文　望月とよ子　三井　精義　井原トノヨ　松友　都　小西アキヨ
長野県　牛山　光子　綾部はつゑ　森田　静子　久保田泰子　伊藤　梅子
宮入　貞夫　泉田　君子　宅見　運保　渡部　守
岐阜県　渡辺　三三　吉田　綾　山本　峰子
鳥本みさを　堀尾　藤吉　高知県　近森　幸恵
静岡県　山田　登世　飯田たつ子　浜田喜次太郎　五百蔵国号
土屋まさ子　大塚　かね　服部くにゑ　福岡県　樗木孝二郎　秦　サカエ
江藤ふみ子　松下　竜二　青山アヤ子　荻野千代子　西原　康雄
愛知県　山田　あき　川越　コウ　金子庄之助　鐘ケ江敬介　初瀬　隆乗
岡島みね子　川村　正一　大原　儀一　小林　繁幹　吉松　貞子　家迫　ソヲ
大森　すず　小山内小美賀　一瀬クモエ
滋賀県　小寺　洋子　正野　きぬ　佐賀県　犬山タツノ　坂本　トセ
京都府　村上　増枝　中川　修　山田　雪子　宮崎　ツヨ
八木　きよ　大町　末子　長崎県　林　文枝　前田　フサ
大阪府　馬場冨美子　福田　音和　大石　春見　山下　タエ　板浦　重雄
中野フヂエ　松宮　花子　熊本県　鬼海　富夫　北村　権蔵
兵庫県　山野イクエ　安福　道明　江口フジエ　塚野ヨシ子　植川　二男
山形　雅俊　山本　允子　柴崎　晃　村上佳寿子　山部シゲモ
清水　つちゑ　大分県　衛藤　金喜　石塚　文子
和歌山県　福井　栄子　宮崎県　森　フサエ　友枝カオリ
鳥取県　杉川　及江　藤原　照子　山口　ミワ　高橋　重美　山口マサ子
島根県　木村　久子　園山　和子　鹿児島県　川畑ツルエ　浜崎　武一

和田　芳久　村上　ノキ　染川とめよ
原田　惟行
沖縄県　石原　キク　島袋　ヒデ
会友　江村源次　井上　義夫
十二　徳次　香月　正紀　篠崎　英夫
吉良　正義　豊谷　秀光　高田源次郎
大幡　幸吉　キリバス名誉領事室　ナウル四高会　山本　宏
篤志会員　松平　永芳　土屋　太郎

（以上は平成元年10月1日から、本年4月30日迄に寄付された三〇一名で、全額の合計は一、三三六、三八〇円であります）

新刊「歴史研究」「靖国神社」購読のおすすめ

皆様は次のようなお話を聞いたことはありませんか？

●日清、日露、太平洋戦争はみんな日本の起した侵略戦争だ。

●東京裁判は国際正義が日本に下した鉄槌であった。

●日本は平和条約十一条で東京裁判を認めている。靖国神社がナイショで戦犯を合祀したのは信義に反している。

●靖国神社公式参拝は帝国主義、軍国主義の復活につながる…等々。

皆様は、父や夫や兄弟が、軍閥や国家権力に騙されて不正義な侵略戦争に狩り出され、あたら尊い生命を犬死させられたと言われて納得できますか。

今世の中にはびこって日本人の心を蝕んでいる邪論をものの見事に撃破してくれたのが、標題の名著「靖国神社」です。すべての日本人、特に戦歿英霊の遺族、戦友にとって必読の好著であります。

○この本は先ず巻頭に、松平宮司と森田康之助崇敬者総代、高橋史朗明星大助教授が近年マスコミを賑わせた靖国神社をめぐる諸問題＝国家護持法案、戦犯合祀問題、六〇年の奇妙な参拝方式等に明快な解答を示されています。

その他の三十編の論文は小泉信三先生を始め、日本を代表する各界有識者の珠玉の大文章です。

全巻二百余頁の全文を「環礁」に転載するわけにはまいりませんので、本年十二月末迄に本会を通じて購読を申込まれた方には送料共、一二六〇円のうち五〇〇円を本会で補助することといたしました。従って皆様の浄財支出は七六〇円になります。

心ある方々で御輪読下さい。

靖国神社に二千万円奉納

英霊にこたえる会

二月二十八日、英霊にこたえる会の井本臺吉会長以下役員六名が靖国神社に参拝し、今年も二千万円を奉納されました。同会からの奉納は今年で十五回目であります。

同会は、戦歿英霊に対する尊崇と感謝を、公の行事として実施されるよう推進する全国規模の団体で、本会も昭和六十年に加盟しております。（環礁43号17頁参照）

本会は、靖国神社維持に協力するため先に靖国神社奉賛会に団体加入し、微力乍ら些かの貢献をしてまいりました。（環礁37号9頁）

右の両団体は何れも個人会員の増強を望んでおりますので入会のお気持のある方は前記の環礁をお読み下さい。

本部だより

☆**定例慰霊祭の期日が変わりました。**

慰霊祭を気候のよい時にしてとの声が特に高まりましたので、二月の総会で来年から三月又は四月に行うことになりました。**来年は四月七日（日）です。**

直会旅行は千葉県の佐倉、成田、犬吠崎、香取神宮の方面を考慮中です。

☆**「環礁」の発行日が変わります。**

慰霊祭と総会の期日の変更に伴い、「環礁」の発行日を次号から今より一ケ月繰下げて、二月一日と八月一日とします。

☆**政府主催全国戦歿者追悼式**

八月十五日に日本武道館で行われる追悼式に参列したい方は、七月七日迄に電話を下さい。

当会本部　〇三―六六一―八七六〇
夜　間　〇三―七二〇―一二四八

☆**入会のおすすめ**

この会のあることを知らない方が沢山居ります。お知り合いに本会をPRして下さい。マーシャル諸島とギルバート諸島方面の戦歿者の親族ならば誰でも御入会頂けます。同方面に勤務された戦友の皆様には会友として御参加頂いております。入会金は要りません。会費は一人一年間二千円です。

☆**お便りをお寄せ下さい。**

この「環礁」は同じ境遇の仲間たちの心のふれ合いの場としてお気軽に御利用下さい。身のまわりのこと、趣味やレクリエーションのこと、この会に対する卒直な注文など何なりお寄せ下さい。原稿は原則としてお返ししておりませんので、返却を要するものはその旨を書き添えて下さい。採否と多少の手直しはあらかじめ御了承下さい。

☆**正誤訂正**

52号16頁―段中の「児玉襄」は「児島襄」の誤りでした。

本　部
〒103 東京都中央区日本橋人形町一―八―二（泉商事ビル）
マーシャル方面遺族会
電話〇三―六六一―八七六〇番
FAX〇三―六六一―六二四一